



奈良井宿の町並み

Narai-juku: An expansive post town nestled in the mountains

山中の長大な宿場町「奈良井宿」 長野県塩尻市

特集 山のマチ、山のムラ
Special Features / Mountain Towns and Villages

株式会社千代田コンサルタント／社会環境事業部
松元 涼子（会誌編集専門委員）
MATSUMOTO Ryoko



山中の長大な宿場町

奈良井宿は、長野県塩尻市の奈良井地区にある長い歴史を持つ宿場町である。長野県の南西部に位置し、江戸時代の主要街道である中山道の宿場の一つだ。現在も、当時の面影を色濃く残す町並みが続いている。

奈良井宿は、標高約900mと木曾の宿場の中で最も高い場所にありながら、江戸時代には、東西約200m、南北約1kmにわたって町並みが続き「奈良井千軒」と呼ばれるほど、大変な賑わいを見せていた。最盛期には2,000人以上が働いていたとも言われている。このような山奥になぜ、巨大な町が栄えたのだろうか。

中山道と奈良井宿

中山道の歴史は、奈良時代の大宝律令（701年）

によって整備された東山道^{とうさんどう}につながる。東山道は、奈良の都（平城京）から東国へ通じる幹線道路で、当時の国家交通網「七道駅路」の一つだ。当初、東山道は神坂峠（岐阜と長野の境・標高約1,595m）を越え伊那谷に抜けるルートだったが、険しすぎて通行が難しかったこともあり、枝道として、木曾古道（吉蘇路）が敷かれた。この道は、山の中腹に造られていたが、江戸時代に入ると、川に沿った低地に中山道の原型が開削され、宿場や一里塚、関所等が整備されていく。

戦国時代には、武田氏が交通・軍事拠点として宿駅を定め、奈良井宿もその一つだったとされている。その後、1601（慶長6）年に徳川家康が五街道を指定、1602（慶長7）年に伝馬制度が設けられ、中山道六十七次が定められる。「中山道」は、江戸と京都を結ぶ約540kmの街道であり、木曾谷を通る区間を木



図1 奈良井宿周辺図

曾路と呼ぶ。奈良井宿は、美濃国（現在の岐阜県）と信濃国（現在の長野県）との境にある「木曾11宿」の一つで、江戸側から数えて2番目の宿場であった。

奈良井宿は、厳密に言えば木曾地域から外れているが木曾11宿に含まれ、木曾の一部として扱われている。それは、中世末期から木曾谷を支配する木曾氏の砦がこの地にあり、木曾谷の軍事的要であること、木曾谷の北の玄関口、鳥居峠入口であること等、軍事、歴史・地理的に重要な要衝だったからであろう。

奈良井宿と利用者

中山道は、伝馬制による宿駅制度を定め、幕府直轄で管理された。宿駅制度は、適当な間隔で配置された宿場に人足と荷駄用の馬である伝馬を一定数以上常備し、公用の役人の荷物の運送にあたる仕組みだ。各宿場は、これらの幕府御用のために人馬の提供を命じられ、その見返りとして宿場を営し、一般の客の宿泊や荷物の輸送の権利を得ていた。

江戸時代中期、庶民に旅行ブームが広がる。当時



写真1 鳥居峠の麓から見た奈良井宿全景

は観光目的の旅に許可が下りなかったため寺社への参拝という名目で、お伊勢参りや善光寺参りに出かけた。御嶽信仰^{おんたけ}にかかる御嶽登山が盛んになると、全国から多くの御嶽山信仰の人々も訪れた。御嶽山と木曾路を行き来する人々によって、木曾谷の流通は更に促進された。

明治に入り、木曾の街道は上下を往来する旅人でにぎわい、京から江戸に都が移ったことにより、人馬・物資が幕末以上に動いた。また、女人の旅が解かれたことに加え、御嶽参りで女人禁制が一番早く解かれたことで、急激に街道の改修が行われるほど盛況となった。

また、中山道は、関所での取り締まりが厳しい東海道と比べ比較的通りやすく、陸路が多く渡し場で止められることが少なく、自然条件などに影響されず安定して通ることができたため、多くの旅人に利用された。

木曾地域と奈良井宿

江戸時代初期、奈良井宿の木曾の年貢では、木曾谷の他の宿村と異なり、奈良井・贅川村^{にえかわ}に地子（地代）金の徴収制度（土地を所有する代わりに地代のようにお金を納める制度）が残っており、家並に課せられていた。江戸時代、江戸では町人における地子金を免除していたにもかかわらず、徴収していたのはそれだけ奈良井宿が特別だったということが考えられる。

一方、江戸時代、木曾地域では、地域の約9割は森林であるため、狭い耕地の作物（米等）だけでは

領民を養えないとして、領民は米年貢の代わりに木年貢が課されていた。しかし、戦国時代終わりから、城郭・社寺建築の木材需要の急増における全国的な森林乱伐により、木曾谷も江戸時代初期に森林資源の枯渇に見舞われた。尾張藩は森林保護に乗り出し、「木一本・首一本」として、木を1本でも伐採したら斬首刑という、厳しい取り締まりを行った。五木（ヒノキ・アスナロ・コウヤマキ・ネズコ・サワラ）の他、厳しい時代には、ケヤキ、クリ、アカマツ、カツラ、カシ等も停止木（伐採禁止）となった。領民は禁伐を課される代わりに既得権として、藩から村に支給される御免白木（使用が許可された材木を割って半製品にした材料）を利用し、工芸品や木材加工を発展させることができた。奈良井宿は、木曾谷住民に許された御免白木6,000駄のうち1,500駄（1駄は馬1頭が運ぶ荷物の重量、約135kg）もの材料が割り当てられ、檜物細工や塗物等を多く生産し、地場産業の木工品や漆工品の名産地へと変化した。

「奈良井千軒」と言われるほど栄えたのは、宿場に職人町も構えていたためでもある。奈良井では、明治に錆土という良質な下地素材が発見されたことによって堅牢な平滑面を作れるようになり、庶民の生活用具としての漆器だけではなく、高級調度品など様々な製品へ展開していき、産地として飛躍的な発展を遂げていく。木櫛に漆を塗った「塗櫛」等は、行き交う旅人の手ごろな土産品として全国に広まり、奈良井宿の名をさらに全国へと広げていく。

奈良井の町並みと拡張

奈良井宿は、街道に沿って南側（京都側）から上町、中町、下町の三町に分かれ、町の中心部である中町に本陣、脇本陣、問屋が置かれていた。宿場には旅人の宿泊を担う旅籠も建ち並び、身分や目的に応じて利用することができた。宿場である道幅は一定ではなく、中町が一番広く緩い坂道であり、上町、下町の順に狭く急な坂道であった。

上町と中町の境には「鍵の手」と呼ばれるクランク形状の道路があり、宿場内に道の屈曲を作り、敵の直進と見通しを防ぐという宿場町を守るための施設として機能していた。

一方、上町と下町は、木材の生産・加工・販売に関わる商工業のまちだった。家屋の間取りも産業上

の特徴を反映しており、中町、上町、下町の順に経済的に恵まれていた。

江戸時代後期になると、地割が著しく細分化され、まちが変化する。奈良井宿では中町の住民の経済力が高かったが、下町には中町の住民が所有する控え屋敷が多く、そこに奈良井宿への流入者や、「かど（親方に隷属している者）」の身分から自立した者たちが住み着くようになる。奈良井宿には近世初頭から、檜物師が住み着いており、彼らは木工職人を「かど」として抱えていた。さらに無役の者を一人前の宿駅負担者に引き上げ、町並みの外側にあった屋敷地を取り込むことで、まちが拡張していく。

奈良井宿の経済成長に伴い、立地が限定される山側より、奈良井川沿いの東側に家屋が多く建ち並び、家屋が建てられる場所にはびっしりと裏屋が形成されていった。

現在の奈良井宿

宿場の中には5カ所の水場が設けられており、来訪者を歓迎する。街道と直角に西側の山裾に向かう小径があり各社寺に通じている。北から八幡社・専念寺・法然寺・大宝寺・神明宮・長泉寺・浄龍寺・



写真2 元櫛問屋である中村邸に残る「塗櫛」

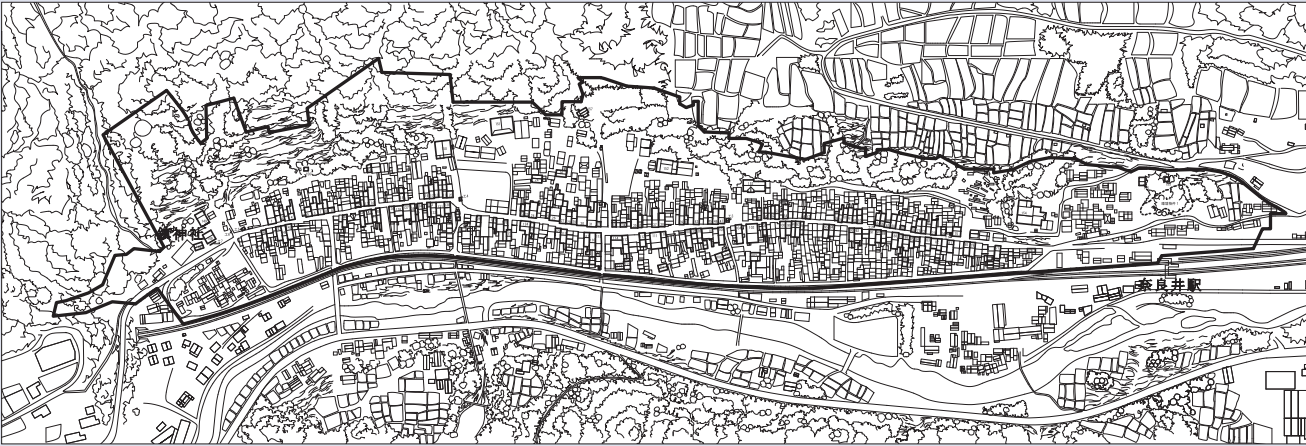


図2 塩尻市奈良井重要伝統的建造物群保存地区 <https://www.city.shiojiri.lg.jp/uploaded/attachment/11990.pdf>

若宮社・鎮神社の4社5寺も並ぶ。山際にいくつかの山門が並んでおり、まちが栄えていたことが推測できる。

奈良井の庇は何枚もの木の板を重ねて作られている（鎧庇）。また、敷かれた何枚もの板を支えるため、「猿頭」と呼ばれる彫刻を施した桟木を2尺前後の間隔で打ち、全体を鉄鎖で吊るす。間口が狭く、1階よりも2階をテラス上に張り出す構造（出梁造）だ。これにより、2階部分がせり出し建物に重厚感が感じられる。奈良井宿の拠点であった中町には、間口の広い家が多くみられる。板戸の表裏に格子の組子がついた建具（葺）がある。中村邸では、柱間が1間（約1.818m）以上あるため、中間に取り外し可能な方立を立て、この間に3枚の戸を横に落とし込む形をとっている。中の1枚は板戸と障子戸の両方を準備し、昼間は障子、夜は板戸をはめていた。

江戸時代の問屋場は通常2軒あり、月の前半後半に分け、交代で業務担当した。奈良井宿では上問屋が手塚家住宅で、下問屋で伊勢屋であり、今も存在する。

宿駅制度は、1870（明治3）年の宿駅制度廃止まで続いた。明治の道路改修で国道から外されたため、奈良井宿は宿場時代の街並みがほとんど昔のままの姿で保存された。長大な街並みは、1978（昭和53）年、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定さ



写真3 奈良井宿に残る建築様式（中村邸）

れる。この景観は、自然に保たれているのではなく、50年以上にわたる継続的な保存活動の賜物だ。奈良井宿は、街並みを大切に保存しつつも、観光客を迎え入れ、今なお住民が暮らしを営む貴重な歴史的長大集落である。

<参考資料>
1)「山国の街道と秘境文化 木曾路/飛騨路/五箇山郷」桜井正信著 1971年 株式会社有峰書店
2)「道路の日本史 古代駅路から高速道路へ」武部健一著 2015年 中公新書
3)「山口村誌 上巻」山口村誌編纂委員会編 1995年 山口村誌編纂委員会発行
4) 中山道木曾路 奈良井宿観光協会HP <https://www.naraijuku.com/>
5)「木曾・檜川村誌」檜川村誌編纂委員会編 檜川村
6) 塩尻市HP 奈良井重要伝統的建造物群保存地区 <https://www.city.shiojiri.lg.jp/soshiki/36/3735.html>

<写真提供>
P22上、写真2 松田明浩
写真1 服部晃大
写真3 松元涼子